

ICTを活用した小学校外国語活動の カリキュラム開発

学校名 羽曳野市立高鷲小学校

所在地 〒583-0881
大阪府羽曳野市島泉2-1-19

ホームページ
アドレス <http://www.city.habikino.osaka.jp/es/taka-s/>

・研究の背景

平成23年度より小学校において新学習指導要領が全面実施され、第5・第6学年で年間35単位時間の「外国語活動」が必修化された。小学校における外国語活動の必修化までにはおよそ20年間の検討の経緯があり、その背景には『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」および同行動計画などに見られるように、各学校段階を通じて外国語教育の充実を進めようとする文部(科学)省の一連の施策がある。これらの施策は外国語教育の充実を産業競争力の再生や経済の活性化につなげようとする政治的・経済的立場からの要請や、「これからの日本人が英語が使えるように」という一般的な要請に影響を受けて策定されてきたものである。しかし、こうした外在的な要請の影響を強く受けた結果として必修化が決まったことにより、充実した外国語教育を行うための制度の整備や学校現場の実態から内在的に求められる教育活動との調整に課題を残したままで小学校の外国語活動は新設されることとなった。こうしたことから、小学校における外国語活動は新設領域としてゼロからのスタートではなく、マイナスからのスタートを余儀なくされている現状があり、学校現場に混乱が生じているという一面がある。本実践研究では、以上の問題意識から研究助成を受けることによって物心両面で学校における外国語活動の取り組みを活性化させることを目的として、研究課題を「ICTを活用した小学校外国語活動のカリキュラム開発」とした。

・研究の実施

【研究計画の立案】

実践研究の実施にあたって、申請者が鳴門教育大学教職大学院(以下、大学院)で外国語活動の課題と学校現場の現状について分析を行い、課題について①制度に起因するもの、②教員の認識に起因するもの、③領域の指導のあり方に起因するものの3つにまとめ、それぞれについてカリキュラム開発を通して解決を図るとともに、取り組みが学校現場の多忙化や教員の疲弊を招き教育活動全体を後退させることのないようにする必要があることを確認した。

分析に続いて計画立案のための検討を行い、カリキュラム開発に必要な目標の設定、教材の選択、授業の実施、結果の評価の方法について決定した。検討の過程において、本実践研究が前段で確認した学校現場の多忙化や教員の疲弊の要因となることを回避するため、申請者が大学院で外国語活動の先行研究及び先行実践事例、学習指導要領や学校英語教育について研究し、目標の設定に関して提案すること、目標に沿った教材の作成や提案授業を実施すること、評価の方法について提案を行うことを確認し、大学院と学校が連携しながら実践研究を進めることとした。実践研究の全体計画を図1として、以下に示す。

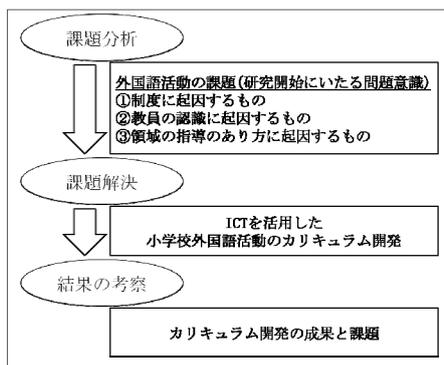


図1 実践研究の全体計画

【目標の設定】

目標の設定については、申請者が外国語活動の先行研究及び先行実践事例の検討を行い、昭和女子大学付属昭和小学校(2002)、柳瀬(2009)などを参考にして、外国語活動を英語力の向上を主な目的とする中学校以降の英語教育とは意味が異なるものの、広い意味での英語教育としてとらえ、学校英語教育全体を見通した包括的な理解のもとに授業における具体的な活動と結びつけて目標を設定し、提案した。

外国語活動の目標に関しては、学習指導要領に「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」(文部科学省、2008)との規定があるが、各学校においてはこの目標を学校の年間計画や個別の授業における活動と結びつけて具体化することが必要となる。本校では、小学校の外国語活動が新設にいたる検討の過程においては英語教育を行うものとして準備が進められていたものの、教員や授業時数の確保、教材などの制度的条件が十分に整わないままで必修化されたことにより、領域の内部において教育目標や教育内容と現実の教育活動が乖離していることに対処することが必要であるとの認識から学校目標を設定した。設定した目標を図2として、以下に示す。

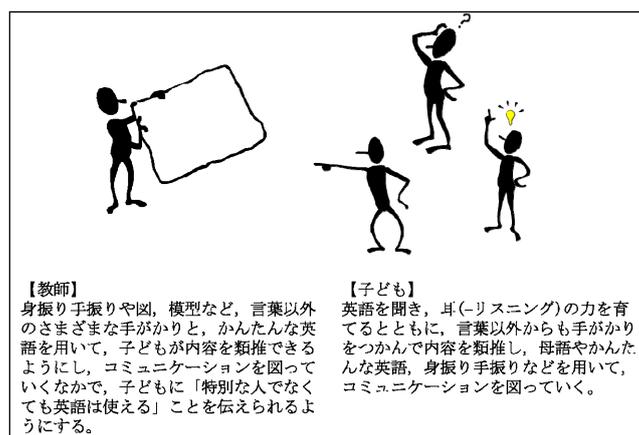


図2 外国語活動の学校目標

【教材の作成・提案授業の実施】

目標の設定を受けて申請者がプレゼンテーションソフトを用いてスライド教材を作成し学校に送付したものを第5・第6学年の教員が中心となって検討し、授業実践を行った。また、申請者も学校で第5・第6学年の教員とともに授業の検討やチーム・ティーチング及び提案授業の実施などを行った。本年度実施の授業の一例

を図3, 図4として, 以下に示す。

色をテーマにした活動①

活動の概要
 フルーツの白黒写真を見て, 何のフルーツか, 何色をしているか, わかりますか? りんごやぶどう, グレープフルーツなどは, 1 つの種類の中にもさまざまな色をしているものがあります。フルーツを切ってみれば, さらにたくさん色を見つけることもできます。グループで相談して, 虹の色とその並びを考える活動にも取り組んでみましょう。

育てたい子どもの姿
 ・フルーツの英語での言い方を知ろうとしている。
 ・フルーツの種類や色などを考え, 伝えようとしている。
 ・グループで相談して, 虹の色と並びを考えている。

授業の展開
 ①フルーツの白黒写真を見せて, 種類や色をたずねる。



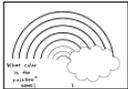
It's a black and white picture.
 What's this?
 Apple?
 Is this red apple? or green apple?

②フルーツを切った白黒写真を見せて, いくつかの色があるか, たずねる。



Do you know this fruits?
 It's a watermelon.
 (指を折つながらたずねる)
 How many colors?

③グループで相談して, 虹の色とその並びを考える。



Let's make a group.
 This is a rainbow.
 What color?
 Let's color a rainbow.

図3 実践事例①

人をテーマにした活動

活動の概要
 子どもたちの知っている人などのさまざまな情報を聞いて, それが誰かを考えていきます。台湾と香港では「超人」がそれぞれ別のキャラクターを意味していることや, ドラえもんを意味している不思議な文字から, それがこの国で使われているものかを考えたりします。国語で学習した人の名前をグループで相談して思い出す活動にも取り組みます。

育てたい子どもの姿
 ・英語で話される人やキャラクターなどについてのさまざまな情報を知ろうとしている。
 ・さまざまな情報から, それが誰の何かを考えて, 伝えようとしている。
 ・グループで相談して課題に取り組んでいる。

授業の展開
 ①人物についてのさまざまな情報を聞きながら, それが誰かを考える。



Who is he?
 His birthday is 1835,1,10.
 He founded Keio University.
 He is ten thousand yen bill.

②漢字やほかの文字などから, それが誰かを考える。



What's this?
 Do you know this character?
 Is this alphabet?

③グループで相談して, 国語で学んだ人の名前を思い出す。



Do you remember his name?
 His full name is very long.
 Let's remember his full name.
 This is group work. Let's try.

図4 実践事例②

教材の作成と授業の実施にあたってプレゼンテーションソフトを用いてコンテンツを作成し授業に取り入れることで, デジタルテレビ・パソコン・デジタルコンテンツを連携させた ICT 環境が構築され, web に存在する大量の情報をカリキュラムに活用できるようになった。

外国語活動のカリキュラムに ICT を活用することには, かんたんな英語を用いて行われる授業のなかで児童が言葉以外からも手がかりをつかんで内容を類推してコミュニケーションを図っていくための表現物としての意義だけでなく, 緘黙や難聴などにより特別な支援を必要とする児童が音声を中心にして展開される外国語活動の授業に参加していくための支援ツールとしての意義もみとめることができる。

【評価】

本実践研究において設定した外国語活動の学校目標(図2)及びそれに基づく授業の実施から, 意図した教育活動がどの程度達成できたかについて, 授業ごとに行った児童による振り返りカードの記入と教員による授業の省察などから授業評価, カリキュラム評価を行った。児童による振り返りカードからは, 「なんとなく, えいごを自然にわかってきていることがわかりました。文章をかけるようになりたい。」「えいごの時間をやってるうちに, 英語をきけるようになってることに気づきました。ほかの国のたべものや, 学校のようにすをもっと知りたい。」といった感想が得られたが, こうした感想は本実践研究において設定した外国語活動の学校目標(図2)に沿った授業が実践できたことによって得られたものと考えられる。これは, 申請者が提案授業の実施を通して得た印象とも整合するものである。

・結果の考察

【カリキュラム開発の成果】

本実践研究に取り組んだことにより、外国語活動のカリキュラム試案を作成することができた。作成したカリキュラム試案は、外国語活動の学校目標(図2)を達成するため児童が興味を持って英語を聞くことやコミュニケーションを図る楽しさを感じられることを重視し、「話題・内容・タスク」の混在型シラバスにICTを取り入れたものである。本実践研究において作成したカリキュラム試案を図5として、以下に示す。

A案	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月						
5年	色をテーマにした活動	形をテーマにした活動	数をテーマにした活動		地理をテーマにした活動	食べものをテーマにした活動	動物をテーマにした活動		植物をテーマにした活動	人をテーマにした活動							
6年	人をテーマにした活動	動作をテーマにした活動	色と形をテーマにした活動		旅行をテーマにした活動	比較をテーマにした活動	数と形をテーマにした活動		生物をテーマにした活動	食べものをテーマにした活動							
B案	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月						
5年	色	形	数	地理	食べもの	動物		植物	人	色	形	数	地理	食べもの	動物	植物	人
6年	人	動作	色と形	旅行	比較	数と形		生物	食べもの	人	動作	色と形	旅行	比較	数と形	生物	食べもの
C案	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月						
5-1	色		数	形	地理		動物	食べもの	植物		数	人					
5-2	形		色	数	食べもの		地理	動物	人		植物	数					
5-3	数		形	色	動物		食べもの	地理	人		植物	数					
6-1	人		色と形	動作	旅行		数と形	比較	生物		地理	食べもの					
6-2	動作		人	色と形	比較		旅行	数と形	食べもの		生物	地理					
6-3	色と形		動作	人	数と形		比較	旅行	地理		食べもの	生物					

図5 カリキュラム試案

上掲したカリキュラム試案は、いずれもデジタルテレビ・パソコン・デジタルコンテンツを連携させた授業実践を取り入れており、児童にとっては授業で扱われる内容とともにICTが興味を持って活動に取り組むための要因となり、それが本実践研究において目標とする「英語を聞く」活動に効果をもたらしたものと考えられる。また、ICTの活用によって教員・児童双方のICTリテラシーの高まりも観察された。本助成によって校内に整備されたICT機器が他教科・領域でも活用されるようになってきている点も成果として挙げられる。さらに、カリキュラム開発にICTを取り入れたことでスライド資料やミュージックビデオ等のデジタルコンテンツの蓄積も進めることができた。これらの教材は校内のサーバーに専用フォルダを作成し、一元的に管理することによってカリキュラムの充実に資するリソースとして活用していくことが期待できる。

学校の教育活動全体にとっての成果として、本実践研究が申請者による大学院での研究と学校の教育活動との連携によって進められたことで研究と実践の分担と還流が可能となったことから、学校現場の多忙化や教員の疲弊を招くことなくカリキュラム開発がすすめられたことが挙げられる。

【今後の課題】

今後の課題として、本実践研究を通して作成したカリキュラム試案の単位時間ごとの内容をさらに具体化し

ていくこと及び第5・第6学年の2年間を見通したカリキュラムの体系化を進めていくことが挙げられる。また、本実践研究で作成したスライド資料等の質と使用者である教員にとっての利便性が充たされ、汎用性のある教材としてカリキュラムに位置づけられるようにするため、第5・第6学年の教員及び校内の外国語活動部会を中心にさらに検討を行っていく必要がある。加えて本年度の実践研究は外国語活動の必修化初年度ということもあり、申請者の大学院における研究と教員による学校での授業実践を分担する体制を取り、外国語活動の研究と実践が学校の教育活動全体に過度な負担とならないように留意してきたが、次年度以降は本実践研究の蓄積を受けて外国語活動の研究主体を校内の外国語活動部会に移すことなどにより、学校において研究と実践が還流するための体制を整えていく必要がある。さらに、学校における外国語活動のカリキュラム開発を学校の教育活動全体に多忙化や疲弊といった負の影響をもたらすものとしてではなく、未知の領域に対する試行錯誤が許容される組織において教員が主体的に取り組みに参画するなかで、子どもにとって価値のある教育実践が創造される学校文化の形成に寄与するものとして運営していく必要があると考える。

本実践研究を通して得られたカリキュラム開発の成果を市内の小学校で構成する教育研究会において報告し共有していくことや、学校 web ページを用いて成果を発信していくことも今後の課題となる。これらの取り組みを通して本実践研究の成果物であるスライド資料やミュージックビデオ等のデジタルコンテンツとその活用方法を紹介することで、市内の小学校間で外国語活動に関する情報交換・交流が図られ学校間連携が進んだり、学校 web ページの閲覧者と研究成果を共有することで小学校における外国語活動の進展に貢献したりしていくことも期待できる。

・参考文献

- 小泉清裕. 2009. 「子どもと親と先生に伝えたい現場発!小学校英語」 文溪堂.
- 松川禮子. 2004. 「明日の小学校英語教育を拓く」 アプリコット.
- 文部科学省. 2008. 「小学校学習指導要領解説 外国語活動編」 東洋館出版社.
- 大津由紀雄編著. 2004. 「小学校での英語教育は必要か」 慶應義塾大学出版株式会社.
- 佐藤学. 1996. 「カリキュラムの批評-公共性の再構築へ-」 世織書房.
- 白井恭弘. 2012. 「英語教師のための第二言語習得論入門」 大修館書店.
- 昭和女子大学付属昭和小学校 研究代表小泉清裕. 2002. 「各教科の学習内容を生かした英語教育の実践-小学校教育の原点について考える英語教育-」 読売新聞社.
- ラボ教育センター編. 2011. 「佐藤学 内田伸子 大津由紀雄が語る ことばの学び, 英語の学び」 ラボ教育センター.
- 柳瀬陽介. 2009. 「学校英語教育の見通し-言語コミュニケーション力論・複言語主義・コミュニケーション論」 大津由紀雄編著『危機に立つ日本の英語教育』 慶應義塾大学出版株式会社.